

Eureka VI

六年制通信 No. 20 平成30年10月27日(土)号

一人の時間を大切に

先日の朝礼で、運・鈍・根について話しましたが、この通信にも書いておこうと思います。この言葉は、まだ若い頃に誰かの自伝を読んで知りました。誰の本だったかも忘れたし、この言葉自体の出典も知りませんが、記憶に残っています。運・鈍・根の順番を入れ替えて鈍・根・運だと書いてある本もありました。

「運」については、何度も書いたと思いますが、幸運の女神の微笑みを受ける人とはどういう人かについて、幸田露伴をはじめ昔から多くの人が考察しています。それらをすべて調べたわけではないのですが、私なりに思うところがあります。幸運の女神はローマ神話でフォルトゥーナ（英語の fortune です）、ギリシア神話ではテューケーと言いますが、前髪はあっても後ろ髪がなく、過ぎ去って手を伸ばしても捕まえることはできない、つまりチャンスは逃したら二度と手に入らない、という話として有名ですね。しかし私は、そんな女神でも「一人を慎む」人には前髪を垂らしてくれるのではないかと考えています。一人を慎むとは、一人の時の行動こそ慎重に正しくあれ、ということです。一人の時、誰の目も届かない時の行動がその人の本質を表わしています。集団の中では自制されている行動も一人だと崩れていくものです。人間の弱さですね。だからこそ、女神はきっと、君たちが一人の時の行動を見ているのではないかと思うのです。また、私（わたくし）を捨てて公（おおやけ）に寄与しようとする行動も、女神はちゃんと見ているように思います。私心のない言動は女神を引き寄せる、これは多くの人が言っていることです。

「鈍」については、鋭敏すぎるより愚鈍な方がよい、つまりなまじ頭がよいとすぐにはわかった気になるので、少くらしい鈍いという自覚があった方が何事も粘り強くできるという意味が本来の用いられ方なのですが、私は朝礼で、これは「小賢しさを排除せよということだ」と言いました。私は「鈍」を知的正直であれ、という意味だと捉えています。小賢しい人間は不誠実であり、その場しのぎの言動が多いものです。ですから、よく小さな嘘をつきますね。朝礼では掃除の例を出しましたが、小賢しい人は適当にやる。特に誰も見ていないと必ず手を抜く。最後までちゃんとできない。自分の不誠実さを知りながら、事がばれなければいいと考える。こういう人は、全く成長しない。もちろん女神が微笑むはずもない。しかし、こういった小賢しさは誰もが持っているものです。これも人間の弱さだね。ですから、自分の中にあるそういう一面を自覚して、「小賢しさ」vs「知的正直」の闘いに勝ってほしいと思います。ただし、毎日よくよく気をつけていないと勝てませんよ。

「根」は根気です。何をやるにもこれが大切ですね。継続は力なり、ですから。私はこの6年間で、君たちに辛抱強く学ぶ意欲が身につけば、それで三重中高の教育は成功だと考えています。君たちがどこに進学しようと、どのように社会に出ようと、辛抱強く学ぶ意欲さえあれば大丈夫、そう信じています。学校の教科の勉強でも、どれほど便利なツールが開発されたとしても、寝ている間にできるようになるはずがない。時間をかけて覚えていくことが全ての基本にあります。理解できるまで辛抱しなくてはなりません。社会に出て、何か新しい取り組みが必要になったときなど、なおさらです。必ず、辛抱強く学ぶ意欲があるかないかが決め手になります。

この意欲を醸成するために、私は一人きりの時間を大切にすべきだと考えています。静寂の中に身を置いて、一人きりで勉強してほしい。現代社会は、無用な「音」が多すぎる。シーンとした環境は、求めなければ作れなくなりました。しかし、静かな、そして孤独な時間が根気を養うのには最適です。単語を覚えるのもいい、本を読むのもいい、気がつけば1時間がたっていた、2時間が過ぎていたという経験を重ねてほしい。そうして身につけた集中力が根気につながります。

もう一つ、根気をつけるのに大切なことがあります。それは、例外を作らないこと。前にも書きましたが、佐久間象山の言う「学問の大禁忌は作輟なり」は忘れてはならないことです。「作輟(さくてつ)」は「やったりやらなかったりすること」ですよ。これは厳に戒めなければなりません。静かな環境を作って、一人きりで勉強し始めたとしても、次の日に止めてしまっただけでは意味がない。調子が悪いとか、別の用事があるとか、止める理由には困らないものです。しかし、例外を作ってははいけません。自分で決めたことを守らなくなると、自分で小さな挫折を繰り返すことになります。逆に、自分で決めたことを守り通すと、それだけで大きな自信になります。それに、そんな君たちを幸運の女神は微笑んで見ているはずですから。

今週のおすすめ

・池井戸潤 『七つの会議』 (集英社文庫)

元銀行マンの池井戸さんは『果つる底なき』で江戸川乱歩賞を受賞し、『下町ロケット』で直木賞を獲っています。東野圭吾さんもこの二つを獲っていますね。

デビュー以後、得意の銀行が舞台だったり、あるいは零細企業 vs 大企業の痛快な物語など、数多くの作品を書かれています。私は企業で働いた経験がないので、読んでいて手に取るようにわかるということはないのですが、エンターテインメントとしては十分に楽しめます。この『七つの会議』も面白くて、頁を繰る手が止まらなかった。企業で働く大変さを少しは理解できたような気になります。

君たちも、やがては社会に出ます。企業でもどこでも、何らかの組織に入る人は多いでしょうね。個人の正義と組織防衛の論理、そういうことに頭を悩ます日が来るかもしれません。思いがけないことが起こるのが人生ですものね。

この本は、面白いだけでなく本当の勇気とは何かを考えさせられますよ。

BGMは森高千里の 雨 でした…。